

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(66) (完)

——第630号から第635号——

門 田 俊 夫

第630号 1714年12月8日(水曜日)

口をつぐみなさい。(ホラティウス)¹⁾

何か書いたり、寄せられたものを添削したりする暇がありませんので、つぎの手紙をお伝えするのがふさわしいと考えました。

11月22日、オックスフォードにて
前略

この企てを公表することで、学識者が貴方の思索を読んで受け取るに違いない満足感を一時停止してくださると、厚かましくも寄稿者の一人に加えていただきたいと思います。人にとっては大変有難いことです。

分別もあり気立てのよい人が音楽への嫌悪感を公言し、同時に、平気で音楽は非常に心地よくためになるのだと認めているのを聞くとしばしば不思議な思いに駆られます。こういった人たちが高尚な喜びをいろいろ喚起させてくれる芸術に無関心であることは不幸な矛盾だと思われます。

しかしながら、少数の人たちは自分自身あるいは他者の理不尽な偏見によって、単に楽しみのために設立された音楽クラブに嫌気がさすのかも知れませんが、敢えて言わせていただきますと、神への賛美から成る荘厳な旋律に不満を抱く人はいないはずです。

この件ではすでに貴方が先手を打っていらっしゃるものと思います。(聖職者の中には随分進んでいる人たちがいますが)音楽の犠牲や崇拜はいろいろな国々の法律や慣習で役割を持っています。この点では、異教のギリシア人やローマ人、聖なる世界のユダヤ人やクリスチャンは一様に同意しましたが、摂理の他の部分では意見が合いませんでした。

外国の教会で用いられている華やかな音楽がとても感動的なので、これが最も優れているのだと考える人たちがいることは分かっています。しかし、お祈りの場での音楽で守られている控え目に対する小生の判断は揺れています。第一日課が始まるまでのボランタリー(オルガン独奏)という慣習には非常に賞賛に値するものがあるように思われます。これ

1) ホラティウス『頌詩』3.1.2

があることで、間もなく受け取ることになる神の真理に入っていく心構えをすることになります。そして、これによって心から世俗的な関心事を振り払うことが可能になり、心の乱れがすべて静められ、魂は平穩そのものになるわけです。そこで簡単な礼拝によって、心は奮い立たされ、すでに来世の喜びに包まれ忘我の境地に近づきます。

この点で、敏感な観察者たちがしばしば、わが国の教会の組織は私たちを非常に簡素で規則的な方法で導きますので、すっかり敬虔な気持ちに引き込まれてしまうのだと褒めているのを耳にしたことがあります。(往々にしてあるのですが) 絶えず続くお祈りによって気分が薄れ始めると、敬虔な小休止を与え、歓喜に満ちた賛美歌を歌うことによって元気な状態に戻してくれるのです。非常に感動的なメロディで和らげられたこの上なく崇高な歌詞が必ずや魂を謙虚にさせ、帰依の頂点にまで高揚させてくれるのは確かです。万軍の主の恐怖が非常に表現豊かなメロディで語られるのを聞くと誰でも必ず畏敬の念を抱くことになります。また、慈悲深い父の思いやりがあり親愛の情を感じさせる特質を聞くと誰でも必ず心は穏やかになって、神に対する愛情を抱くことになります。

一般に、感情の起伏、柔和あるいは気高い気配を魂に注ぎ込むことが音楽の生来の特権ですが、祭壇ではこれが大いに活用されます。音楽の威光を受け入れる根拠が理性に基づいていると、音楽が精神に及ぼす印象はそれだけ深く永続的なものとなります。音楽は私たちの周囲を静けさで覆い尽くし、大切な感謝の祈りを捧げるときに妨げとなる自惚れとか不謹慎な思いを一掃してくれます。感謝の祈りは、全能の恩人がおっしゃるように、日々被造物に注いでくださっている無限の祝福に対する最も喜ばれるお返しなのです²⁾。私たちがこの感動的な方法で神に話しかけると、とうてい恍惚の感を抑えることは出来ません。心は優しさの絶頂に包まれます。すべてが敬虔と愛につながるのです。

無分別な人が祝福された聖霊たちが恥じ入らないほどの敬虔な気持ちで恐れ多い支配者にひれ伏しているのを見て、聖霊たちは喜び驚くでしょうか。

ミルトンの『失樂園』第3巻から一節を引いてこの内省を締め括りたいと思います。ここでは、調和のとれた者たちがつぎのように気高く描写されています。

彼らは再び冠をとって、頭にかぶり、黄金の豎琴を手にした—
常々から音の調べを整え、いつも箴のように腰に帯びていた
煌めく豎琴を手にした。まず初めに魅惑的な和音にみちた佳麗な
序曲を奏したのち、直ちに聖なる歌を歌い始めたが、聞く者の心に
崇高な恍惚の感を呼び起こした。美しい旋律が流れ出した。
声をあげてこれに参加するのを躊躇する者も、自らその旋律の
一部を担うのを拒む者も、一人としてなかった。
このような見事な協和が天上にあるのだ³⁾。

2) ニコルスによると、これは本紙の発行直前に発布された、1715年1月25日ジョージの王位継承のために感謝の祈りを捧げなさいとの布告への言及かも知れないとのこと。

3) ミルトン『失樂園』第3巻第365-71行。

拝啓

周知のように、町のあちこちに「お喋りクラブ」と呼ばれる大声を張り上げる連中の一団がいます。しかし、私が一番驚いたことは、彼らが今では教会に押し寄せ、そこを拠点としていることです。この一団は最近厚かましくもシティ・ゲート近くの教会の一角を「お喋りクラブ専用席」と命名したのです。素人集団からなるこの低劣で陽気な連中は、体裁だけの学識も持たずに批評家のふりをしています。そして、慢心して自分たちは牧師から何か嘲笑のネタを手に入れることが出来ると考えています。言うまでもありませんが、毎日曜日にその気もなく厄介な説示の場にやって来る紳士諸氏は、学問や雄弁に対して、この軽蔑に値する連中の脆弱な努力では染められることのない確固たる個性の持ち主なのです。説教壇がこの紳士諸氏あるいは彼らの友人の見知らぬ人たちに占領されようとそうでなかろうと、このクラブのやり方はつぎのようになります。彼らの考えからすると崇高過ぎる意見が述べられるとなると、珍しい話題になるあるいは実に素晴らしい分別と巧みさによって修正されるあるいは論駁された点がうまく処理されないとなると、要するに、どんなことであっても彼らの神学の限界を超えるないし彼らの審美眼に合致しないとなると、彼らは全員、直ちに警戒し、ホックリー・イン・ザ・ホール⁴⁾の剣闘士のように興奮して互いに目を合わせ、気の利いた発言を待つのです。もし誰かが口を開くと、全員が興奮し、専用席の中心に頭を寄せます、つぎに、一糸乱れずドラムをたたきながら、頭を上げ立ち上がります。そして、奇妙な表情を浮かべ大げさな身振りを加えながら、結論が出るまで大声で騒々しく話し合います。説教が終わった後の賛美歌の間中話し合いは続き、ベル以外には彼らを黙らせることが出来ないほどです。これで終わりはしません。彼らを受け入れるために時々試験的に置かれている隣の席に合図を送ることで、教会中に彼らの大声を行き渡らせることを目指すのです。

この行為の無礼さだけでなく愚かさはこれほどひどいものはありません。説教の後に残るものが何もなくなってしまいます。なぜなら、私たちの生気が脅えるときはいつでも、彼らが興奮し、収拾がつかなくなり、彼ら自身あるいは彼らの近くにいる人々は説教についての話が出来なくなるからです。何か本当に斬新なことが提案された場合、お祈りは言うまでもありませんが、自分たちの考え方にどれほど合わないにしても、彼らほど無思慮でない人たちは生来の好奇心によって全体を聞くように仕向けられるからです。

神聖なことを嘲笑うことは、非国教徒の秘密礼拝集会での哀れな声よりもはるかに許し難いものです。秘密礼拝集会の哀れな声には少なくとも見せかけの慈悲があり、その素振りが見えないところでは、誠実な人たちに健全な教訓を刻み込むかも知れません。でも、笑いは弁解の余地はなく、秩序や礼節のルールを破り、完全に冷静で落ち着いた気持になることが要求される重要な事柄に、いい加減であることを示すことになります。要するに、この上なく愚かであることを立証していることにほかなりません。

ここでは、場所の神聖さとか牧師への敬愛とか教区全員の集会に与えられるべき畏敬の

4) 第436号参照。

念については触れないことにします。彼らにはただ、放蕩息子を改心させるために、スペインの靴屋が息子に家族の威厳に少しは配慮しなさいと言うように⁵⁾、(私たち市民は週に一度そういう日を持つものだから)紳士としての彼らは来世のために悔い改め上述のひどい悪習を抑えるように申し添えて置きます。この悪習によって彼らは天と地を軽蔑しており、あらゆる慣習に逆らっているのです。

敬具、アール・エイチ

第631号 1714年12月10日(金曜日)

【ティッケル】

何も手を加えなくてもござっぱりしている。(ホラティウス)¹⁾

数日前、乗合馬車で町から数マイル出掛ける機会がありました。下卑た伊達男と綺麗な若いクエーカー教徒の娘さんと乗り合わせました。その時あまり話をする気になりませんでしたので、二人を観察して何か思索のネタを手に入れようと考えて後方の席に着きました。二人の独特な容姿を見ているだけで十分に私の気を引きました。紳士はスーツを着ており、コート的大部分にまで混ざっている髪粉から逃れるために、離れた席から気づいたのですが、スーツの下地は黒でした。かなり値の張った彼の髪²⁾は非常にぞんざいに肩までかかっていたので、1712年以来櫛を入れたことがないかのようでした。ほとんど露わになっている下着は顎先から一番下のボタンまで質素なかぎタバコで汚れていました。彼が嵌めているダイヤの指輪(当然水を嫌がるのですが)を見ると、最初に発見された鉾山のがらくたの中ではさぞ輝いていたことだろうと思いました。一方、綺麗なクエーカー教徒は清楚な身なりでした。衣服にはシミ一つありませんでした。極細の亜麻布のひだで縁どられている汚れがなく清らかな卵型をした顔は、黒のフードの下で際立っていました。彼女が身につけている地味な色のお陰で、彼女の腕の白さが目立っていました。簡素な衣服は飾りっ気のない彼女の言葉遣いにぴったりでした。こういったことを総合して見ますと、二人からは彼女の信仰についての意見を聞くことは出来ませんでした。彼女が純真な人であることは分かりました。

この珍しい経験をしたことで、私は「清潔」についていくつかの手掛かりを寄せ集めてみることになりました。私は、これはアリストテレスの言う「不完全な徳」³⁾の一つと考えます。そこで、清潔を三項目に分けて推奨したいと思います。清潔は礼儀正しさのしる

5) レストレインジ『寓話』2.133。サー・ロジャー・レストレインジ(1616-1704)はイングランドのジャーナリスト兼パンフレット作者で、熱烈な王党派。ホイッグ党や非国教徒を攻撃したことで知られる。

1) ホラティウス『頌詩』1.5.5

2) タトラー紙第54号で、髪は40ギニー(約42ポンド)したとの記事がある。

3) アリストテレス『ニコマス倫理学』4.9.8。ブルタルコスは、「自制がそれだけでは十分に徳に値するとは考えられず、徳よりも価値が低い」(「倫理的徳について」)、と述べた。

しであること、清潔は愛情を生み出すこと、そして、清潔は心の清らかさに類似していることです。

第一に、清潔は礼儀正しさのしるしです。この徳が備わっていない人が人前に出ると必ず明らかに相手の感情を害するのは衆目の一致するところです。資産家になればそれだけその責務は高まります。国々の比較をするときにも、芸術や科学だけでなく清潔さの度合いが用いられます。国は文明化されればされるだけ、清潔ということを考慮に入れます。進歩して来た真実を納得するには、ホッテントットの女性とわが国の美人を比較するだけで十分です。

つぎに、清潔は愛情の養母と言うことが出来ます。美しさは確かにごく普通に愛情を生みますが、清潔は愛情を保ちます。絶えず清潔を保っている冷淡な顔つきをした人物は大勢の奇麗なふしだらな女の心を射止めます。清潔を保っていると、年齢それ自体が無愛想になることはありません。いつも滑らかで輝きを失っていない金属片を見るのと同じことで、さびで腐食している新しい器を見るときよりも、年齢を見るときの方が喜びは大きいものです。

さらに清潔が他者に好印象を与えるように、自分自身に心地よさを与えてくれるのだと言えるかも知れません。清潔は優秀な健康保存薬となるのです。心身に有害ないくつかの悪徳も清潔の習癖と矛盾します。ところで、以上の意見をどのように考えるかは読者に委ねることとし、第三の清潔は心の清らかさに類似しており、当然、洗練された感情を吹き込むのだという点について意見を述べることにします。

習慣化することで、この上なくひどい行為もお馴染みになると嫌悪しなくなることを私たちは経験上知っています。一方、近隣に立派なお手本がいる人たちは、最初に嫌なことを見ると逃げ出します。私たちの認識に関しても同じように事が運びます。心に伝わるあらゆるイメージの入口である五感は、通常取り巻いている物事の印象を伝えることしか出来ません。そのため、当然、その思いが美しく優雅な場合、絶えず私たちを取り巻いている対象によって、純粋で汚れない思いが暗示されるのです。

気候が温暖であるために、寒冷地よりも一層清潔であることが求められる東洋では、清潔が彼らの宗教の一部に組み入れられています。ユダヤ教の掟（ならびにいくつかの点でその模倣であるイスラム教の掟）には、水浴び、清め、そして、これに似たその他の儀式が数多くあります⁴⁾。こういった儀式が行われるようになった好都合な理由は多々ありますが、主たる狙いは明らかに外見を洗うことで心の清らかさを予示することでした。この真実を裏付けるいくつかの命令が申命記に伺えます。こういった儀式は砂漠での便宜を図って設けられたにすぎなく、そうでないと長年に渡って住めなかっただろうと間違った解釈をする人たちもいます。

この随筆はイスラム教の迷信的な行為についての記述が何かで読んだことがある物語で

4) シャルダン『旅行記』7 参照。Jean Chardin (1643-1713) はフランスの旅行家でダイヤモンドを手に入れるためにインド・ペルシアに滞在。新教徒であったために、1681年イングランドに渡り、宮廷出入りの宝石商となり、チャールズ2世からナイト爵を与えられた。

締め括りたいと思います⁵⁾。

とても高潔な一人の修道僧がある朝、運悪くムハンマドに捧げられているクリスタルグラスを持ち上げたとき、下に落として粉々にしてしまいました。しばらくして、息子が入って来ると、毎朝のことですが、彼は両手を広げて息子を迎えました。だが、若者は出て行くとき敷居につまずいて腕の骨を折ったのです。老人がこういった出来事を不思議に思っていたとき、メッカからの巡礼団が通りかかりました。この修道僧は巡礼団に近づいて行き、祝福を求めました。彼が神聖なラクダの一頭を撫でていると、そのラクダに蹴られて、ひどい傷を負わされたのです。彼の悲しみと驚きが増しました。そして、その朝、慌ててうっかりしていたために手を洗うのを忘れていたことを思い出したのです。

第632号 1714年12月13日（月曜日）

【ティッケル】

わたしは点呼の数を満たしに、闇のあいだへ戻る。

（ウェルギリウス）¹⁾

心にとってごく自然な調和と秩序を愛する気持を持っていると、時として非常に奇妙な空想に陥ることがあります。あるフランスの著者によると、この気高い信条は非常に些細なことを面白がるのが大好きだということです。深みのある哲学者が床板一枚ごと一歩一歩熱心に読書しながら部屋の中でまる1時間歩き回る姿を目にすることが出来るかも知れない、と彼は言います²⁾。読者は誰でも、私の助力がなくてもこの種の例を思い出されることでしょう。年齢の数だけ書物を出版していたのはグレゴリオ・レティだったと思います。彼はそれをルールとして定め、亡くなる年まで守ったのでした³⁾。おそらく、ホメロス自身に彼の詩集をギリシアアルファベットの数だけの書物に分けさせたのはこの種の思いだったのでしょう⁴⁾。ヘロドトスも同様に、著作を詩神の数に合わせました⁵⁾。そのため、多くの学識者は9冊以上になっていればよかったのにと考えています。

叙事詩人の中には、著作の数に関してきちんとウェルギリウスに倣った人たちがいます。ミルトンでさえ、多くの人々から、ほかでもないこの理由から巻数を10から12に変えたのだと考えられています⁶⁾。カウリーが言うように、彼もまたこの点で『アイネーイス』を

5) バイロン・ポーター・スミス『英文学におけるイスラム』（1939）参照。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』6.545

2) このフランスの著者については明らかになっていない。

3) ベール, John Kirckman 参照。ピエール・ベール（1647-1706）は啓蒙主義の先駆となったフランスの懐疑論的哲学者。

4) ベール, Aristarchus 参照。

5) 現存するアディソンの最初期の手紙（1694/5 2月12日）では、ヘロドトスの翻訳について言及されている。

6) ミルトンがウェルギリウスの例に倣って10巻から12巻にした証拠はないと思える。第2版でのこの

真似て『ダビデ讃』を完成したのは彼の構想でした⁷⁾。この種の完成には理性の上では何の根拠もなく、こういった偉大な名前への当然の敬意からすると、これはある種の気まぐれと見なすことが出来るという私の意見にみなさんは同意なさるものと思います。

わが書籍商を守るために最適の例を上げます。彼が言うには、スペクテイターを8巻にしたのは7というのは非常に中途半端な数字だと思ったためだとのこと。その一方でこの重要な件については真面目な理由もいくつか挙げられました。特に、7は正確に賢人の数なのだから、天の最も美しい星座は七つの星で構成されているのだとの意見があったのです。彼はこういった意見はその通りだと認めましたが、それでも7は中途半端だと主張したのです。同時に、自分に第一級の新聞を十分に供給してくれれば、この仕事を続けていくに足る支持者を見つけると言うのでした。こうして船を進水させ船出した彼は、時々、自分が可能だと考える方向へと舵取りしているのです。

町の人々がやがて予測するこの巻の結末はおそらくそれにふさわしい著者にお返しすることになるかも知れません。

スペクテイター紙への寄稿者たちについて評価するとなると、非常に目新しい話題についての素晴らしい詩が入っているつぎの手紙を公表するのがふさわしいと考えます。

1714年11月30日、ダブリンにて

観察者殿

貴殿は最近、女性の読者に、かつて祖母たちが針仕事に時間の大半を費やしていた古き良き習慣を取り戻すようにと忠告なさっていました⁸⁾。小生は全面的に貴殿のご意見に賛成します。もし女性たちがお茶の席で失われている多くの時間をこの無害な気晴らしで過ごすことになれば、多くの良き隣人たちの評判だけでなく自分および子孫のためにもなるものと考えます。とはいえ、小生としては貴殿に詩人肌の婦人のケースを考えていただきたいと思います。こういった女性は貴殿が与える助言を進んで受け入れますが、貴殿が想像するほど簡単にはペンとインクを手放すことは出来ません。そこでお願いですが、彼女たちが前かがみになって針仕事をするのに疲れたときには、少なくとも時には空想というほかの楽しみに耽ることを認めてあげてください。最近わが国の婦人たちがとても気に入っている実に変った仕事があります。この仕事は詩的才能にぴったり当てはまっていると思えます。それは岩屋を作る仕事です。一人で作り、貝殻ひとつひとつもすべて自分の手で張り付けたとても美しい岩屋を持っている婦人を小生は知っています。ここでこの美しい建築家宛ての詩をお送りします。こういった婦人の時間の過ごし方が観察者殿に認められるかどうか分かるまで、本人に見せる積りはありません。その詩を添えて貴殿にお伝えしますので貴殿のご判断をよろしくお願いします。

草々、エイ・ビー

変更は出版者の意向だったと考えられる。

7) 1656年の著作集への序文。

8) 針仕事については、第606号参照。

岩屋の〇〇夫人に寄せて⁹⁾

これほど意匠を凝らした完璧な岩屋を作れるのは
あなた以外ではカリュプソしかいません。
市松模様となった小石やキラキラ輝く貝殻は、
実にバランスがよく、見事な配置だ。
あなたの考えには驚くべき輝きがあり、
自然が与えるよりも素晴らしい美がここにはある。
色とりどりの形や光沢のある色合い、および、
細密な調和がとれているのも、すべてあなたのお陰だ。
その力強い音でその気にさせられた石が踊り出して
テーベの壁となった名高いアムピオンの豎琴も、見事に調和の
とれているこの岩屋を崩すことは出来ないだろう¹⁰⁾。
夕暮れの雲もこれほど鮮明なアーチをかけることは出来ないし、
どんな色を用いても空の虹を表現することは出来ない。
全室が苔むした部屋となっているこれほどの確な作品に
比べれば、素朴な自然が自慢出来るものは何もない。
わたしたちは明るい斑色の光景を目にしてハッとするのだ、
偶然だとするには規則的すぎ、芸術だとするには粗野すぎるのだ。
この光景に魅了されうっとりとしたわたしの心は、
古の詩人たちが鼓舞されたのと同じような心持を掻き立てられる。
迷信が伝える作り話も古の伝説の妖精たちの生き生きとした群れも
熱狂的な詩神は真実だと思い、この場所は聖なところであり、
この才能はあなたのものだと考える。
激しい歓喜に我を忘れた詩神は快く暴き出す、
徐々に心地よい驚嘆の念が湧き上がってくるさまを。
迫真的な韻文で熱心に描き出す、
この素敵な場所のさまざまな美を。
その間、あなたの巧みな手が追い求める
あらゆる迷路の中で、詩神は賞賛に満ちた仕事を
心に留める。
わたしがこの大胆な意匠に耐えられたらいいのに。
そうすれば、あなたのように幸せな技巧を自慢できるのだが。
でこぼこの貝殻をきちんと並べ、ありふれた物に実に

9) この詩の作者は後にクロインの首席司祭となったジェイムズ・ウォード師。彼は1714年トリニティー・コレッジで修士号を取得した。

10) アムピオンはユピテルとアンティオペーの息子で、彼の奏でる豎琴の音が非常に美しく、石がひとりでに踊り出して壁や家になったといわれる。

素晴らしい美しさを添えるのだ。
 詩行一行一行に精選された言葉を並べ、心地よく調節し、
 光り輝かせるのだ。
 わたしの詩はまさしく空想を元気づけ、
 陽気な一篇のように、その描写に魅力を添えるのだ。
 そして、わたしは力強く声を上げるのだ、
 岩屋の創建者を称える歌を喜んで反響する岩屋が
 わたしの仕事を認めてくれるようにと。

第633号 1714年12月15日(水曜日)

【ピアース】

人事について論じるために天上から降りて来たら、
 彼はもっと高尚で荘厳に考えかつ喋るだろう。(キケロ)¹⁾

つぎの論考は手を加えず私の手元に届いたままお伝えします。

12月12日、ケンブリッジにて

非常に繁栄した国家ができる限りの奨励をした中で、どうして優秀な弁論家の数がほかの学術に秀でた人の数よりも少ないのかという質問は、古代の人たちの間ではごくありふれたものでした²⁾。小生の友人はこの問題に対して、よく愉快そうにヘロドトスの意見を当てはめたものです。ヘロドトスによると、有益な動物ほど多産だが、人間にとって獐狂で有害な動物の場合はそうでないということになります³⁾。ヘロドトスはその例として、常に育てているか産んでいるかのどちらかである兎と一頭しか産まずそれで受胎能力を無くしてしまう雌ライオンを挙げています。しかし、友人には楽しがらせておいて、昨今では古代人よりも大きな不満の種を抱えていると小生は考えています。雄弁力が求められ、啓示が教えてくれるのと同じように崇高な演台のテーマを提供してくれる例の厳粛な催しが近づいていますので、拙論では、真実および確固たる雄弁に対しては古代の名高い弁論家よりも私たち現代人の方が優位に立っているのだということを明らかにしたいと考えます。

その最大かつ重要な違いは、ほぼすべての増幅力が存在している共通の場所が現状の存続状態のみを考慮した行為の利益つまり誠実さから選ばれている点です。しかし、徳性を申し分のない状態にまで高め、来世のことまで考えさせ、より高度でより持続的な報いと

1) キケロ『弁論家について』34.119。本号は、1748年バンゴー主教(ウエールズ)、1755年ロチェスター主教に任命されたザッカリー・ピアース(1690-1774)による。1714年当時はまだケンブリッジ大学の学生だった。

2) キケロ『弁論家について』1.2.6-1, 1.4.16

3) ヘロドトス『歴史』第3巻第108節。

罰を提案するキリスト教の精神の方が、聞き手を感動させ、その結果自然に最も重要な事柄を追求する気持ちにさせるのに適しているのです。史家たちが言うように、もしペリクレスが聴衆の確固たる意志を揺るがし、すべてのギリシア人の気持を燃え上がらすことが出来ていれば、国の現在の繁栄とか敵の侵略に対する恐れは話題になることはなく、演説者に期待することもなく、一度味わってしまうと、分別あるいは時からの救済策のない害悪について聴衆に警告を発する必要もありません。来世での害悪は現世の害悪より大きいのですから、キリスト教信仰での説得の動機は単なる道徳的な動機よりも大きなものとなります。ところで、現在私が触れていることは感情を掻き立てる力だけに限っています。雄弁にはまた別の役割があります。これは確かに雄弁の代表作です。超自然的なことつまり崇高がそれです。この点では、クリスチアンの弁論家は文句なく優位に立っています。私たちの観念は啓示によって限りなく広がり、理性の目は限りなく永遠に向って広がり、神性に対する考えは非常に立派で洗練され、幸不幸に対する理由は非常に明白ですから、これらへの瞑想は、私たちの講演に人間の考察力を越えた気高い迫力と不屈の力を添えるでしょう。キケロは完璧な弁論家に天体の性質を帯びた技巧を求めています。なぜなら、彼が言うところによれば、心というものは広範囲にわたり、抑制が利かなくなるからということです。人事について論じるために降りて来たら、彼はもっと高尚で荘厳に考えかつ喋るだろう、ということになる訳です⁴⁾。同じ理由から、この優秀な大家は啓示が明らかにしている素晴らしい光栄ある神秘の研究を奨励していたに違いありません。被造物は創造主より劣っていますので、現世のこの上なく気高い人たちでもはるかにこれより劣っている訳です。異教徒たちの中で最も賢明で物知りの人も来世の状態に対してはお粗末で不完全な知識しかありませんでした。彼らが伝承あるいは理性によって、有徳の人たちの存在を決めるのは魂だけが肉体の分離ではないのだ、という漠然とした希望を持っていたのは確かです。しかし、彼らは罰と不幸という来世の状態を信じようとしませんでした。また同じ理由から、アペレスは目を失ったことが全体の傷にならないように、見る人には顔の片側だけしか見えないようなアンティゴノスの絵を描いたのでした⁵⁾。要するに、人間の状態を最も都合よく描き、人間性にとって欠陥と思われるものを隠蔽しようとしたのです。私はしばしば述べているのですが、上記の弁論家が哲学的な講演で不死について触れるときにはいつでも、眠りから覚めたところで、不死の荘重さに刺激され脅えているように見えるのです。何か並外れたことを考え出そうとして想像力を張り巡らせ、際立った考えを口にするので、いわば、文章に輝きを添えるのです。彼は自信がなく落ち着きがないのですが、不死への観想で掻き立てられているように見えます。ひとえにこの輝かしい可能性を抱くことで大いなる真理の愛好者を引き出し、不死への確信を手放さないとの強固な意志を明らかにしたのでしょう。もっとも、それは誤った考えであることが判明したのですが。しかし、もし彼が長生きしてキリスト教が明るみに出したあらゆることを知っ

4) キケロ『弁論家について』34.119

5) プリニウス『博物誌』35.36.90。アペレスはギリシアの画家。アンティゴノスは紀元前4世紀のマケドニア王。キュクロプスはシチリア島の一つ目の巨人族（ギリシア神話）。

たとしたら、この上なく崇高な復活と最後の審判について瞑想するとき、雄弁の力をいかに発揮したに違いありません。来世の全容が明らかになり人目にさらされると、彼の心はどれほど喜びで満たされたことでしょう。彼の想像力が彼を顕現の秘儀の追求に急ぎ立てていたに違いありません。彼は電光石火のごとく聞き手の気持を捉え、墮落した人たちの反感があるにもかかわらず、彼の雄弁が実に生き生きとかつ永続的な彩色を施したこういった輝かしいテーマに聞き手の注意を引き寄せたに相違ありません。

キリスト教徒には以上の利点があります。私が最近ロンギノスの断章をふと目にしたのは大きな喜びとなりました。この断章はヴァチカン図書館の新約聖書の草稿の初めに、彼の識見の証拠として保管されています。ロンギノスはギリシアの名高い雄弁家を列挙したあとで、これにまだ十分評価が定まっていなかった弁護人であるタルススのパウロを付け加えなさい、と彼は言います。異教徒として、彼はキリスト教を非難します。そして、公平な批評家として、彼はキリスト教の促進者と唱道者に有利な評価を下します。私には、後者は聖パウロの能力に対する彼の意見の重要性を増しているように思えます。なぜなら、正反対の偏見が渦巻く中で、彼は伝道者パウロの長所を認めざるを得ないからです。そしておそらく、ロンギノスが言うように、聖パウロが訪問する国々の人たちの前に姿を見せるとき、神の力によって教義が与えられており、説教をする任務が与えられていたのです。聖書に、ある状況で、彼が雄弁であったと思わせる証拠があります。パウロはおもに語る人なので、ルステラの人々が彼をマーキュリーと呼んだのです。そして、雄弁を考えだし統轄している神マーキュリーのようにパウロを崇めようとしたのです⁶⁾。この話では、彼がひとえに雄弁家、とりわけ、名高いデモステネスやその同時代人の話術を備えた雄弁家と考えられています。彼らの話術は賞賛されましたが、それでも人間的だと考えられました。彼らの雄弁は聞き手を熱中させうっとりさせましたが、神の声ではなく人間の声だと思われました。そんなとき、聖パウロはギリシアやローマの人たちよりもはるかに大きな利点を持っていました。実を言いますと、この雄弁はひとえに彼が伝える教義の力のお陰だと言えます。この教義が聞き手に同じような力を発揮するのです。教義は巧みな雄弁家によって説かれると、私たちに、エマオへの道中で救世主に出くわした弟子たちが用いたのと同じような言い方をさせる力を持っているのです。「道々お話になったとき、また聖書を説き明かしてくださったとき、お互いの心が内に燃えたではないか」⁷⁾と。私の考えを不遜だと思う人がいるかも知れませんが、聖パウロほどはっきりとした証拠と足跡を残した雄弁家はいないと断言しなくてはなりません。雄弁が生まれ栄えたアテネで偶像崇拜について論証するとき、彼がその一点のみに留めているのを知って不思議に思われるかも知れません⁸⁾。しかし、読者は、信頼すべき多くの著者が法廷では弁護人が感情的になることをその国の法律ではっきり禁止しているのだと言っているのを思い出されるかも知れません⁹⁾。したがって、彼はここで雄弁でないことは彼が法律を正確に順守している結

6) 『使徒行伝』第14章第12節。

7) 『ルカによる福音書』第24章第32節。

8) 『使徒行伝』第18章第16-34節。

果なのです。しかし、コリント人への彼の復活の話¹⁰⁾ やアグリッパを前にして自分自身の改宗およびみんなが改宗する必要があるといった彼の熱弁¹¹⁾ は実に立派なものであり、批評家の大半が挙げている崇高さの素晴らしいルールに見合った申し分のないお手本です。要するに、わが聖職者にしても、聖パウロの熱弁ほど完璧なお手本はないということなのです。彼自身が語るように¹²⁾、利点が与えられていない彼は信仰に対する特異な信念によって耳を傾けられ、崇められ、後世のお手本となったのです。そうです、わが聖職者は自分たちの説教がどれほどためになるものであっても、聖パウロが示した崇高なお手本とキリスト教が示す確かな手段を受け入れることが出来るということが分るのです。

第634号 1714年12月17日（金曜日）

【ティッケル】

欲の少ない人ほど神々に似ている。(クセノポン)¹⁾

教義の有効性によって人を神に似せることが異教の哲学者たちの誇りとするところでした。そのために彼らが提案する手段がどれほど間違っているとしても、構想は卓越して輝かしいものであったことを認めるに違いありません。発見と想像力が発揮された秀作も、理性を磨き刺激するものと比べられるとほとんど重みを持たなくなります。ロンギノスは実に手厚くホメロスの弁明をします。ホメロスは人間を神々に近づけるために、神々を人間に近づけたのだ、とロンギノスは言うのです²⁾。しかし、キケロがホメロスにそうであって欲しかったと思うように振る舞った古代の哲学者がいたことを認めなくてはなりません。彼らは神々を人間に近づけたというよりもむしろ人間を神々に近づけようとしたのです³⁾。

哲学のこの普遍的な格言によれば、いたずらに神の幸福があると想像した、満ち足りた少なくとも無為の状態に人間を置こうとした哲学者がいました。一方で、非常に徳高い哲学者たちは奇想天外な賢人を創りだしました。彼らはこの賢人の激情と苦痛を免除し、彼を自己充足していると断言するのに十分だと考えました⁴⁾。

この自己充足というものはそれを取り巻く人間哲学の覆いを取り除いてしまうと、何の意味も持たなくなり、善良かつ賢明な人物は激情と苦痛という猛威におとなしく屈しないだけの忍耐で武装するしかなくなります。可能な限り欲望を抑えるようにしなくてはなりません。そして、永続的な喜びの泉を持てるように、多くの美德を魂の中に育まなくてはなりません。

9) これは少々不正確だが、最高法廷では弁護人に要点以外のことを喋るのを禁じたルールへの言及。

10) 『コリント人への第一の手紙』第15章。

11) 『使徒行伝』第26章第2-23節。

12) 『コリント人への第二の手紙』第12章第5-7節。

1) クセノポン『メモラビア』1.6.10（ソクラテスの思い出）。

2) ロンギノス『崇高について』9.7

3) キケロ『トゥスクルム荘対談集』1.26.25

4) ストア派の賢人については、第243号参照。

キリスト教は私たち人間が神性に対する最善の考えを持ったあとで、不完全さを認めたうえで信仰に従うことをつぎの関心事にすることを求めています。この点について聖典からいくつか言及することが可能です。それにギリシアおよびローマの教訓的な著者の格言や賢明な名言を数多く付け加えることが出来るでしょう。

ここでは、ユリアヌス皇帝の『皇帝饗宴』⁵⁾から注目すべき一節を引くに留めます。この皇帝はアレクサンドロス大王を初めとしたローマ皇帝たち全員を回顧し、優位性を求めたとして、アレクサンドロス、ユリウス・カエサル、アウグストゥス・カエサル、トラヤヌス、マルクス・アウレリウス、およびコンスタンティヌス以外の皇帝はすべて排除しました。彼はこういった皇帝が上位に位置していると主張し、自らの行為を非常に有利に表明します。しかし、神々は彼らの行為の栄光に惑わされることはなく、全生涯を通じて彼らを動かしたそれにふさわしい動機と主たる行動基準を尋ねます。神々に対して彼らはつぎのように応じます。アレクサンドロスは自分の目標とするところは征服だと、ユリウスは国で最高の位に就くことだと、アウグストゥスはうまく統治することだと、トラヤヌスはアレクサンドロスと同様、つまり、征服することだと言います。ようやくマルクス・アウレリウスの番です。彼はとても謙虚に常に神々をお手本にするように努めてまいりましたと答えました。マルクス・アウレリウスのこの行為は全員の中で最多得票数と最高の地位を獲得したように思えます。マルクス・アウレリウスはその後自分の考えをはっきり説明するように求められると、神々をお手本にすることによって、判断力とかその他すべての能力を行使するとき神々を真似ようとしたのだと言明します。特に、自分は出来るだけ欲しい物を少なくし、他者には可能な限りの善行を施すことを努力目標にしたのだと断言します。

啓示宗教が徳性を促進する方法はいろいろありますが、道理をわきまえたすべての人々が真似をすべき、神に対してより公正で完璧な考えを持つこともその一つです。異教の喜劇の若者はユピテルの例によって自らの淫らさを正当化するかも知れません。実際、異教の世界の普通の人々の間で流布している神性に対するこういった考えによって大目に見られない罪はまれですから⁶⁾。啓示宗教はお手本である神に、崇高な極致のよりどころだけでなく模倣のふさわしい対象を明記しています。

私たちは現世に留まっている間、数えきれない誘惑にさらされます。誘惑に耳を貸しますと、私たちが神の真似が出来る唯一のものである理性と善の道からそれてしまいます。来世では、受けるに足らない気持ちを掻き立てるようなことには出くわすことはありません。それゆえ、読者には「現世において、幸福が願望を抑制することから生じるのであれば、来世では幸福は願望を満足させることから生じるのでしょう」という金言を送って今日の紙面を締め括りたいと思います⁷⁾。

5) 背教者ユリアヌスとして知られる4世紀の皇帝。

6) ベール、Jupiter 参照。

7) 第574号も同じ文章で締め括っている。

第635号 1714年12月20日（月曜日）

【グローヴ】

あなたが天国と現世双方について瞑想していることを
承知しています。それらがあなたにとって実際より小さく
見えても、天国について瞑想し、現世を見下すのです。(キケロ)¹⁾

つぎの随想は聡明な著者から届いたものです。同一の著者による「珍しさ」についての随想は先の本紙で活字にしたところです²⁾。意見はプラトンの思考法から引き出されていますが、精神を高揚させる一助となり、来世の壮麗さと幸福に対する崇高な気持を吹き込んでくれますので、みなさんにお伝えするのにふさわしいと考えます。

もし森羅万象が聡明な方の所産であるとしたら、この方はそれを創り出すとき自分には間接的な注意を払うことが出来るでしょう。いかなる結果が得られるかを知るために自らの無限の力を試す必要はありませんでした。そのとき、彼の永遠の考えにある世界は現在そうであるように美しいものでした。彼の存在の広大な深淵の中には、その後明らかになるものよりはるかに明るい光景が包含されています。自然の大いなる創造者がほかに全能の意志を発揮することで向上させることが出来ないほど完璧な被造物の体系に実体を付与することによって自らの力を抑制するなんてことはあり得ません³⁾。有限と無限の間には際限のない歳月が過ぎても埋め合わせが出来ない計り知れない隔たりがあります。そのため、神の御業のうちで最も優れたものも、この上なく無完全なものと同様に、等しく神の力が及んでいないに違いなく、同じように安易に超えられるかも知れません。

このように考えますと、(あり得ないことではないと認めざるを得ませんが) 底知れない空間には絶えず新たな誕生がたくさん存在しており、後から生まれて来たものの方がそれまでのものよりもより完璧さを受け継いでいるのだと思う人たちが出て来ます。現在の私の考えではそのようになりませんので、今触れている考察は言うまでもなく神の理解する理想的な世界は創造された世界とは比較にならないほど豊富で多彩で喜ばしい眺望をもたらすのだと言っておくことで満足したいと思います。それゆえ、神がただ単に実に変化に富んだ無生物、あるいは、獣同様の低級な生き物だけが生息する世界を創るとは想定出来ないように、神が理性的な所産を構想した目的は、御業について瞑想し、神自身および双方が幸せであることを喜びとすることにあるのです。その目的を達成するために、神はそれぞれに対応する能力と欲望を授けているのです。神は御業をありのまま再検討するときにも、自身の考えを概観するときにも同じような喜びを覚えます。だが、神は人にもたらされた満足を大いに喜ぶのは確かです。その気晴らしにするために、神はこの巨大な劇場を建設しました。これはせいぜい不死の模倣にほかなりません。人間というものは、来

1) キケロ『国家論』6.19.20

2) 第626号参照。

3) アーサー・ラヴジョイ『存在の大いなる鎖』（1936）参照。

世での幸福な存在を得るための保護観察に付されていると考えると、神の知恵の実に注目すべき事例であり、もし私たちが永遠との関連から神を切り離しますと、全被造物の中で一番不思議で不可解な構成物となります。人間には限りなく多様な知識と自然と摂理の密かな道を歩むための満たされていない好奇心を収容する能力が備わっています。しかし、この能力があるのですが、現在の構造では器官は知性に仕えるよりも卑しい肉体が必要とするもののために尽くすのに適しています。鎖でつながれている小さな汚点から、人間を取り巻く数知れない光の世界について取り留めのない憶測をせざるを得ません。この憶測自体はけた外れの大きさを持っていますが、遠く隔たった天国の空間ではほんのかすかに光るだけに過ぎません。多くの時間を費やし苦痛を味わいながら、一歩ずつ険しい真理の上り坂を進んで行き、眼下にはいつくばっている群衆を哀れみの気持を込めて見つめるのです。そして足を滑らせまっさかさまに墓へと転がり落ちるのです。

こんなことを考えていると、世界の創造主を公平に評して、人間が瞑想するのにふさわしい位置を与えられ、むしろ物から物、世界から世界へと移動する力が備わっており、いち早くかつ驚くべき発見をするための五感や他の希望が提供されている別の状態があるのだと信じざるを得なくなります。サー・アイザック・ニュートンのような天才は、人間の悟性を巻き込んでいる闇の中から飛び出した別種の人物のように登場するのをどのように考えたらいいのでしょうか⁴⁾。私たちが住む広大な装置は彼の目の前に開けており、これを統治する一般的な法則を熟知しているようであり、彼は哲学者として忘我の境地で光栄ある仕事を見つめ感嘆しながら、同時に、創造主に対して敬虔で理性的な敬意を払うことが出来るのです。しかし残念なことに、こういった人にとってもその眺望は限られたものでしかありません。天使あるいは肉体から解き放たれた魂が視野に入れる範囲からするといかにもほんやりとしたものと言わざるを得ません。私自身は来世の壮麗さを喜んで確信しています。神の御業のごく一部しか分かっておらず、ゆっくりと痛々しい歩みでこの地球の表面をあちこち這い回っている私は、やがて想像力を駆使して前進し、自然の活動の神秘的な原動力を捜し出し、天体の迅速な動きに遅れないようについて行くことが出来、自然および精神的世界の連綿と続く出来事の観察者になり、天地創造のそれぞれの場所を訪問し、そこがどうようになっているかを理解し、その道理を理解し、何一つ規則的な下絵もなく配置されているが同一の軌道になっていると思える天体の大きさを測り、(もし私たちがその理論を理解出来れば)各大系が依存しあって宇宙の調和が取れているのだと分かんると考えると嬉しくなります。永遠の世界では、こういった類のことが数多くなされているのかも知れません。この寛大な大望を育むことは有益だと私は考えます。なぜなら、これは気分が一新されるだけでなく、魂に浸透し、理性的な生き物の中での私の現在の地位に見合った能力を発揮させるだけでなく、その能力の向上にもつながり、より高尚な地位に到達するという希望が持てるからです。

他方、人間の究極的な目標は神の恩恵にあずかることです。これがないと人間は希望を

4) アレキサンダー・ポープ『人間論』2.35-38参照。

抱くことは出来ません。神に対する私たちの観念はいくらよく見ても曖昧なものであり、神は被造物に自身を明らかにするのでもなく、隠すのでもなく、いわば気をもませるのです。そのため、ふしだらな自由思想家は神の存在に異議を唱え、その一方で大半の人たちは喜んで神の存在を口にします。彼らは心の中では創造主の恩恵よりも取るに足らないことで満足感を得ることを好み、奇異なえり好みをしている善良な人を嘲笑します。自由思想家が自らの不敬な陰謀が覆されていると気づき、忌み嫌っている真実に改心する時は訪れないのでしょうか。そうです、惑わされている品行が自らの営みの愚かさを得心し、神の導きに従い、感覚の甘言と世間の下劣な贈賄を軽蔑し、天上界の住まいを求める少数の賢人が創造主の姿に最大の願いをかける時は訪れないのでしょうか。現世では、時々神に思いを馳せ、その存在に束の間の視線を投げ掛けるのです。素早くとらえたと思った瞬間に、相手は期待を回避し、完全に困惑して後ずさりします。おそらく天上界の人たちと話をすると確かな方法が何かあるはずですが。靈魂は体の中で、あるいは介在によって浸礼を施されないと、相互理解を受け入れる余地はないのでしょうか。社交的な人物の主たる特権、つまり、お互いに話をして知り合うという特権に関しては、優れた人は劣った人に依存しなくてははいけないのでしょうか。もし物質が創られていなかったとしたら、一体どうしていたことでしょうか。永遠の孤独の中で生きていなかったものと私は考えます。霊的な物質はより崇高ですが、同様にその交わりがより邪魔立てするものがなくかつ深いものであるのは確実です。この意思疎通の方法を、可視世界を知る手段である視覚に似せて「理性的幻視」と呼びます。神はこの方法で自身を天国の諸聖人の直観的知覚の対象とすることが可能なのです。あり得ることですが、状況次第で神は有限の存在である人間の弱さと大きさに常に譲歩することが出来ます。神の御業は完璧さの観念をほんのかすかに反映しているだけで、二次的な認識となるに過ぎません。神を正確に理解するためには、ありのままの神を知る必要があるかも知れません。しかし、ありのままの神とはどういうことでしょうか。人間の心では想像できないことですが、容易に思いつくことは言葉では表すことの出来ない絶え間ない恍惚の状態です。すべての創造された栄光は神の存在の前では色褪せて消え去ります。おそらく神聖な気持になって現世を見事なお手本と比較することが私にとっての喜びとなるのでしょうか。長い年月に渡って実行されて来た本来の賢明な意図を考えるのが喜びとなるのです。こうして神の御業を発見し、神について思いを巡らすのです。体は無限の物質の中に飲み込まれ、心は神の無限の完璧さの中に取り込まれ、神の前にひれ伏して崇めることになるのです。

(完)